

令和元年度 博士論文

イメージと暗示に関する臨床心理学的研究

田 村 英 恵

要旨

【目的】

本論文の目的は、イメージ及び暗示について、イメージ諸特性の関連、暗示がイメージ諸特性へ及ぼす影響、イメージ諸特性と暗示との適合性といった観点から検討し、心理臨床的援助のなかでイメージ及び暗示が有する機能をより活かすための示唆を得ることであった。

第1章では、本論文におけるイメージと暗示の定義、各々の機能を示すとともに、イメージや暗示を介した心理臨床的援助や心理臨床的援助におけるイメージと暗示の関連について述べた。

第2章では、イメージ諸特性や想起に関わる要因、暗示、イメージと暗示との関連について検討した諸研究の概観を行った。これまで様々なイメージ諸特性が検討されてきたが、心理臨床の場ではイメージをいかに鮮明に想起するか、あるいはいかに統御するかが重要であることが示されてきた。一方で、イメージの鮮明性や統御性に焦点をあて、イメージ想起に関わる特性や要因との関連を検討した研究は十分でないという問題点が指摘された。また、暗示によってイメージ諸特性が変化する可能性が示唆されており、実際の暗示下でのイメージの変化に着目した研究を行う必要性のあることを指摘した。さらに、イメージと暗示を組み合わせる場合、イメージに関わる個人差や個人特性と呈示する暗示が適合していなければ、暗示の実現が困難である可能性が示唆され、実証的に検討する必要性について論じた。

以上の議論から、第3章では本論文の目的として、冒頭に掲げた本研究の目的を明示し、目的を達成するための小目的として、(1) イメージ諸特性ならびにイメージ想起に関わる要因の関連の検討、(2) 暗示がイメージの鮮明性及び統御性に及ぼす影響についての検討、(3) イメージの個人特性と暗示との適合性が暗示反応に及ぼす影響についての検討、を設定した。

【対象と方法】

第I部で示された先行研究の問題点と本論文の目的に対応し、第4章から第6章までを第II部としてまとめ、研究1から研究9まで実証的検討を行った。本研究における対象者はすべて日本人大学生および大学院生であった。質問紙調査および実験のうち、各研究に適した方法を採用した。

【結果と考察】

第4章では、イメージ諸特性として、イメージの鮮明性と視覚イメージの統御性を取り上げ、イメージ想起に影響すると考えられる他の要因との関連を検討することを目的とした。第2節（研究1）は、視覚イメージの常用性について取り上げ、鮮明性および統御性との関連について検討を行った。その結果、イメージの鮮明性と統御性の間には弱い相関が認められたが、鮮明性と常用性、統御性と常用性との間には有意な相関が認められなかった。視覚イメージを頻繁に利用していたとしても、それは必ずしも鮮明性の高さやイメージを統御できる能力の高さを示すことにはならないとの考察を行った。第3節（研究2）では、イメージの鮮明性と統御性及びイメージ活動への没入傾向の関連について検討を行った。結果、イメージの鮮明性及び統御性は、イメージ活動への没入傾向と弱い相関が示され、イメージという共通の心的過程と結びつきながらも、鮮明性や統御性と没入傾向とは異なる側面を捉えていることが示唆された。第4節（研究3）は、イメージ想起に関わる個人特性のひとつとして抑うつ傾向を取り上げ、（1）抑うつ傾向とイメージの鮮明性及び統御性との関連を検討し、（2）ポジティブ場面とネガティブ場面を設定したうえで、抑うつ傾向とイメージの特性がイメージ体験に及ぼす影響について検討することを目的とした。結果、身体感覚イメージの鮮明性と抑うつ傾向との間に弱い正の相関が認められた。また、抑うつ傾向およびイメージの鮮明性の高い者は、ネガティブ場면을想起した際に頬のこわばりを強く感じ、イメージの自律性も低くなるが、一方で体を動かすイメージが強くなることが示された。さらに、抑うつ傾向が高くイメージの鮮明性の低い者は、ネガティブ場面想起時には体を動かす感じが低下することなどが示された。抑うつ傾向は特に身体感覚のイメージにおいてその特徴があらわれやすいことが推察された。また、イメージの情動価によって抑うつ傾向とイメージの鮮明性の相互作用の様相が変化することが示唆された。

第5章では、重温感暗示と催眠暗示を取り上げ、各々がイメージの鮮明性及び視覚イメージの統御性に及ぼす影響について検討することを目的とした。第2節（研究4）は、重温感暗示下と覚醒状態で生起するイメージの相違について、鮮明性の観点から検討を行った。結果、重温感暗示下では、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚イメージの鮮明性が高まることが示された。第3節（研究5）では、重温感暗示がイメージの統御性に及ぼす影響について検討を行ない、重温感暗示下では、視覚イメージの統御性が高まる可能性が示唆された。重温感暗示によって弛緩が得られた状態では、覚醒状態に比してイメージの鮮明性

が高まり、視覚イメージの統御が容易になる傾向にあることが明らかになった。第4節(研究6)は、催眠暗示がイメージの鮮明性に及ぼす影響について検討するために、Harvard Group Scale of Hypnotic Susceptibility: Form A (Shor & Orne, 1962)を用いて催眠誘導を行い、覚醒状態でのイメージの鮮明性との比較を行った。その結果、催眠暗示下では、視覚イメージの鮮明性が高まることが示された。第5節(研究7)では、研究6と同様の手続きを用いて、催眠暗示が視覚イメージの統御性に及ぼす影響について検討を行った。結果、催眠暗示下と覚醒状態の統御性に有意差は認められなかったが、催眠暗示下の統御性が覚醒状態に比して高まった実験参加者数が有意に多かったことが示された。

第6章では、心身を弛緩させる際に利用される温感暗示を取り上げ、イメージの個人特性との適合性がどのように影響するのか、温感暗示の効果を反映する生理指標と暗示の体験に関する主観的評定を用いて明らかにすることを目的とした。第2節(研究8)は、イメージの常用性を示す言語型-視覚型を個人特性として取り上げ、温感暗示として言語あるいはイメージを用いた際の弛緩反応及び暗示の体験への影響に関して検討を行った。結果、視覚型はイメージを想起することに対する能動性のために、皮膚温が一旦下降してから上昇する傾向がみられ、実験を通して集中が持続していたことが示された。他方、言語型は言葉を反復することに対する能動性が持続しないものの皮膚温の上昇が認められた。言語型-視覚型という個人特性によって暗示課題に対する姿勢に違いがみうけられ、また、その差異が皮膚温変化に影響を及ぼした可能性が示された。第3節(研究9)では、イメージの鮮明性に関する個人特性として視覚イメージ優位及び身体感覚イメージ優位に着目し、温感暗示として視覚イメージを用いる群と身体感覚イメージを用いる群とを比較することにより、暗示とイメージの鮮明性に関する個人特性との適合性が、弛緩反応に及ぼす影響について検討を行った。結果は以下の通りであった。(1)セッション経過に伴う皮膚温の上昇が得られたのは、視覚イメージ優位で視覚イメージ暗示を利用した群と、身体感覚イメージ優位で身体感覚イメージ暗示を用いた群であった。(2)同じ身体感覚のイメージ暗示を利用した視覚イメージ優位と身体感覚イメージ優位とでは、身体感覚イメージ優位の方が有意に高く皮膚温を上昇させていた。これらの結果より、暗示とイメージの鮮明性に関する個人特性との適合性が弛緩反応を左右する要因であることが示唆された。さらにこの適合性が与える影響は、身体感覚イメージを用いる場合に、より顕著にあらわれることが示された。

第7章をこれまでの研究の総合的考察とし、9つの研究で得られた知見を整理し、本論文の三つの小目的に対する総合的考察および、その臨床心理学的意義や臨床実践上での意義について考察した。最後に本論文で残された課題と今後の展望を提示した。

【結論】

本論文の成果は、第一に心理臨床的援助で重視されるイメージの鮮明性や統御性を取り上げ、その関連やイメージの常用性やイメージへの没入傾向といったイメージ想起に関わる要因との関連の様相を明らかにした点である。いずれもイメージという共通の心的過程ではあるが、それぞれ異なる側面を捉えていることが示唆された。また、抑うつ傾向という個人特性とイメージの鮮明性との関連が示唆され、その関連の様相は想起するイメージの情動価によっても変化することが明らかになった。臨床実践のなかでイメージを用いる場合には、イメージ特性、イメージ想起に影響する個人の特性や、イメージの有する情動価、及びこれらの相互作用を考慮する必要性があるといえる。

第二に、重温感暗示下においてイメージの鮮明性や統御性が高まることを、覚醒状態での想起と比較し、明らかにした点にある。これまで催眠や自律訓練法はイメージを促進させるといわれてきたが、その知見を個人内比較により実証的に示したといえる。一方、催眠暗示下においては、覚醒状態と比較して視覚イメージの鮮明性は高まることが示されたが、統御性については議論の余地の残される結果となった。特に催眠暗示を用いる場合には、暗示の内容とイメージ想起の内容との相互関係を考慮する必要性が示唆された。

第三に、暗示とイメージの個人特性との適合性を考慮する必要性を示した点である。暗示の呈示様式と個人のイメージ特性が適合しているか否かによって暗示の実現が左右される可能性が考えられる。

イメージや暗示を用いる際には、その内容的側面ばかりでなく、イメージ諸特性及び個人特性との関連、イメージと暗示の相互性や適合性といった観点からの検討が必要であることを実証し、臨床実践上での有効な視点を提示したといえよう。